

幽玄

題字
高秀秀信横浜市長

横浜能楽連盟
会報 No.5

平成5年4月16日発行

第四十回 横浜能 盛大に開催

歴史的な舞台が三日間くりひろげられる

記念すべき第四十回横浜能は、平成四年十一月二十五日、二十六日、二十七日の三日間、横浜市市民文化会館 関内ホールにおいて盛大に開催された。

第一日目、演能前に第四十回の記念式典が行われた。

黒谷常務理事の司会により、まず新堀豊彦連盟会長の挨拶があり、続いて、永年勤続役員の表彰が行われた。二十年余にわたって、役員として横浜能をささえた高岡幸彦連盟副会長(観世)、堀内万紗子副会長(梅若)、田所義男常務理事(宝生)の三氏に対し、高秀秀信横浜市長、新堀連盟会長連名の表彰状がおくられた。

そのあと、市長代理馬場助役、県知事代理鶴飼県民部次長よりそれぞれ祝辞が述べられて、式典は終了した。

三日間を通じ各流が四十回記念能にふさわしい番組を上演し、かつ各流それぞれ家元級の出演があつて、場内は盛り上つた。第一回目から出演されている観世元昭先生、今回初めて京都よりわざわざお出で頂いた金剛巖先生、いつも横浜能にはお揃いでお出で頂く梅若六郎、恭行両先生、若手を代表する宝生英照先生、名手友枝昭世先生、そして横浜在住でもっとも古くから出演されている守屋与四巳先生等々、御協力に対して心より感謝申し上げるものである。



第40回横浜能記念式典 会長あいさつ

「狂言教室」は山本則直師を中心になり、わかり易く、楽しい教室となり、約四百名の観衆に深い目は大蔵流山本一門による「狂言教室」、第三日目は、第八回横浜五流合同謡曲大会(アマチュアによる舞台)をあてることとした。

今回は全部夜能であつたため、第二日目、第三日目の昼間は、特設舞台があいているのはもつたないといふことから、連盟として特別企画を立て、第二日

能四十回にあわせた、記念すべき大会となつた。各流トップメンバーを揃え、日頃の鍛錬の成果を舞台にくりひろげたが、特筆すべきは、喜多流と海謡会の合作による素人能「羽衣」であつた。シテは当然のことながら、ワキも囃子方(笛を除く)も、地の一部も素人によつて構成されるという、きわめて珍しい試みであつたが見事成功し、今回の大きな話題となつた。

三日間を通じ三千人の観客動員に成功したことは、流友各位の御協力と横浜市文化事業課の献身的なPR活動のたまものであり、この成功は、横浜能楽堂の完成後の演能に、ひとつの見通しをつけたものといえるであろう。

平成五年の四十一回、六年の四十二回、七年の四十三回の次は、まさしく本舞台で、横浜能が出来るという、大きな希望を抱いて、これからはがんばってゆきたいと決意している。

横浜能楽堂

いよいよ着工!

待望久しい横浜能楽堂の建設は、いよいよ、平成四年度年度末に着工されることになった。業者の入札も終り、竹中工務店、住友建設、紅梅組の三社ジョイントにより、平成七年度中の完成を目指してスタートする。掃部山周辺の住民から、色々クレームがあり、大巾に着工がおくれたが、横浜市市民局文化施設課の御努力で、日照権や工事中の騒音振動等の様々な問題点について、住民側との話し合いもよい方へむかつて決着した。

既に工事費が四年度分ずついているだけに、一刻も早く着工し、予定期間での完成が待たれる所である。

又、能楽堂建設促進会も、平成四年十二月末に、故細郷市長との約束であつた、市民募金、一億円をクリアし、如期の目的を達成することが出来、その使命を完了した。

関係者の皆様の永年にわたる御苦労に謹んで御礼申し上げます。

第四十一回横浜能は

十一月六日に

第四十一回横浜能は、平成五年十一月六日(土曜)、午後一時から、紅葉ヶ丘、神奈川県立青少年センターホールにて開催さ

宝生流教授嘱託会

こいつて

宝生流教授嘱託会 高橋利雄
副支部長

宝生流の家元から、職分を通して、或程度精進を積んだ素人弟子の中から、当流の初歩指導の資格免状を与えられ、流儀の普及発展を図る制度が、先代宝生九郎宗家の創意により昭和十八年に発足した。其後、嘱託免状受領者が相当数に達した為、これが団結と技能の向上を図る為、宗家指導の下、昭和三十年一月「宝生流嘱託会」が結成され、昭和五十九年に「宝生流教授嘱託会」と改称。その会則には「会員の技能の向上と親睦をはかり結束して宝生流の拡大発展を目的とする」とあり、この目的達成の為に種々の事業がなされ、任意加入制の会員は現在三千人余に達し、都道府県別に支部組織を持ち、東京水道橋の宝生能楽堂内に本部を置き、私共はその神奈川県支部として活動している。

年発足、任意加入の支部会員は現在百名前後で、支部主催の会として月例稽古会を始め、会員のための研鑽の場である略称「支部大会」と、支部会員と県内同好者の親睦発表会である略称「県大会」等、本部に準ずる支部会則の下、理事制に依り活動している。更に県内では「横浜宝生流連合会大会」、「五流合同横浜謡曲大会」、「宝生流謡曲と仕舞のつどい」等々の諸団体へ、当支部から参加協力している。



関東甲信越大会「巴」連吟、宝生能楽堂

互いの研鑽と親睦のもと、宝生流の普及発展に努め、教授嘱託の自分を自覚して積極的に活動し、併せて地方文化活動への貢献に、幾分でも寄与していると言えれば幸甚です。

本人の初心者より早く覚えられたのである。ストレスがたまると私は腰をおととして、両脇にボールをかかえている様に腕を丸め、体を少し前かがみに立つ。そしてお腹の底から期々と「今日の修羅の敵はたそ……」などと謡う。気分転換に最適です。体を動かす事が好きなので修羅ものは特に楽しく、例えば「殺生石」の「飛ぶ空」のジャンプ、あれを何回家でやったことだろう。(私の場合あれは嬉しい時にするものです)此の間、息子にロック・ジャンプを教えて貰った。お能の飛び方ができる人ならロック・ジャンプは楽々。いつの日か息子もお能のジャンプに興味が出てくることを望んでいるのです。能がこんなに身近かなものだとわかれば、若い人達のファンが増えることだろう。

仕舞と私

観世流梅若会
パトリシア・マスイ頭山

堀内万紗子先生にお仕舞のお稽古をおやすみしてからいつのまにか十数年が経つが、未だにこうして謡は私の殺風景な生活に美をもたらしてくれる。仕舞の仕事も、順序も忘れていたにもかかわらず今も色々と役にたっている。いつだったかお茶の先生に「一つだけ誉めて頂いたことがある。私の足の運び方が実にきれいだと言ったのである。又、空手と合気道を習った時には、自然に腰の低い位置で体のバランスを取る事ができた。足の長いアイルランド系の私の方が、もっとうまくできる筈の日

彼女の紹介

能楽連盟副会長 堀内万紗子
観世流梅若会

私とパトリシアさんとの出会いは、二十年前の鎌倉宮境内で行われた新能でした。そしてすぐにお稽古が始まりました。まだ来日して数年でしたのに「ひら仮名」「カタ仮名」が完全に読めて漢字も大抵は解読してました。従って仕舞のお型も

子供の袴

観世流梅若会 増澤喜一郎

此んな嬉しい事があるだろう。それは、私の一番上になる兄様(従兄)の祝言に、私が雄蝶となるのだそうで、母が作っ

当神奈川県支部は昭和三十八

(横浜能楽連盟理事)

てくれた袴である。小学校二年の時だった。結婚式当日、袴をつけたら丁度同年輩の従兄弟達が目が欲しがって泣き出した。得意満面今でもその光景は頭にこびりついて離れない。

その後、何かにつけて袴をはきたいが、親は、はかせてくれない。とある日突然、母が、「袴をはいて出なさい。これを覚えるように。」

と口ずさまれて、難しいな。覚えれば袴をはけるの一心。覚えませんでした。へさても牛若ハ……

たまたま苦笑いすることは、明けなば寺への寺でしつかり休んで登るべしと大きな声を出しなさい。との母の御薫陶よろしく。何の意味かわからないまま。

が着物に袴。嬉しい。謡ったら小父さん小母さん方に褒められ袴は、佩けるし、お菓子ほもらえるし、実によき幼き時代であった。

謡って変な声を出すものだ。スナオの声が良いのに。中学校へ行き始めた頃か？ 批判的。何せ祖父、父母がやるのだからたまらない。たまに淋しい声を出すから家中陰鬼でたまらぬ。

中学二年の時か？ 国語の授業に謡曲鉢の木あり。担任曰く、「謡曲というものを聞いた事があるか」と。恐る恐る、「二三

人が手を上げた。「増澤。お前来て週迄に一節覚えてきて、皆の前で謡ってやれ。」それとお前の家には謡曲本がある筈だから、鉢の木の本を持って来るように。」との事。えらい事になった

ナと思っただけれど、よオシ途中迄丸暗記して謡ってやれ、祖父に特訓を受ける。祖父の喜んだ顔。孫に教える事はあんなに嬉しい事かしらん。以後、仲間から、「鉢の木」なる俗名をもらう。

上級生は何時頃からか、「ハチ、ハチ」と私を呼ぶ。

生徒出陣中、千葉九十九里の浜辺で、夜、西瓜を食べ食べ上官が俊寛を謡ってくれた。よくわからなかったが、涙がどうしても出て来て仕方なかった。

まだ食糧も無く焼野原の時、やつと切符を手に入れて京都に行った。確か駅より東の方角に歩いてた。見上げれば釣鐘な

き鐘楼から謡曲らしき聞こえてくる。思わず鐘楼に登らせて戴く。五、六人の人が夕日の沈む嵐山の方向に端坐して謡っている姿は実に神々しかった。

今、私は横浜久良岐研修会の一員である。祖父、父母の稽古本をじつと眺めると、難しい箇所は、赤・青で道標の如く記してある。それを見て心がなごむ

一生懸命、本を持って、朝ラジオの前で背をまげて謡を聞き入

るありし日の母の後姿が目に見える。ああ、私は何てよい供養をしているんだろう。と感ずること暫々。

思えば運命とは先祖の流れの出合。それが歴史と言うもの。それを自覚する昨今である。その認識に於て自己の責任と、これからの課題をどう投げ掛けてゆけばよいかと考える生活をしている。

(原文の通り)

謡入門の記

喜多流 宮地光之

私は、旧制中学生のころ、自分は音痴であった。友達が、君の歌は「ねぶか節」であるという。歌に小節がきかず一本調子で歌っているというのである。そのうえ声が悪いときている。

それから私は、大声で歌いさえすればよい、軍歌を歌うことがあっても、小節をさかす流行歌を歌う自信が全くなくなってしまう。宴会で人と一緒に流行歌を歌うことはあっても、仲間一人で歌えない。

そんな私に、十七年ほど前の或る日、小料理屋の「竹むら」で、喜多流の有名な若手の先生がおられるから、謡を習わないかとすすめられた。私は音痴であるから駄目であると断ると、

謡は音痴がむいていいるから、是非、習えとすすめられた。その気になって習うことにしたのが、苦勞の始まりである。

謡の先生は、喜多流の家元に匹敵する、江戸時代の熊本藩細川家のお抱え能楽師であった家柄の友枝昭世先生で、私よりふた廻り年下の若手ナンパーワンといわれる方である。ご尊父は、友枝喜久夫先生で能楽界の長老として、能を舞えば超一流であり、新聞に好評の記事がしばしば載っている。

さて、謡の練習が始まった。謡の音階は上、中、下音に分かれています。一緒に始めた人は上手に謡っているのに、私は上音には大きな声を出し、下音には

小さき声を出し、仲々音階が定まらない。そのうえ、節廻しを早くしたり、しなかつたりである。先生は教えられるのに苦勞されたことであろうと思う。今、当時の録音テープを取り出して聞くと、一人で吹き出したくなるほど調子はずれである。

一人で練習をしていると、謡を知らない家内が調子が違う違うと指摘するほどであるから、よほど調子はずれで謡っていたのである。



第40回横浜能 2日目 観世流「千手」

しかし、先生は、宮地さんは将来が楽しみである、私に謡をすすめた人に話されていたということを知ると、下手で望みがないかと思って止めるわけにいかなくなりました。これほど下手な弟子はおそらく初めてで、一人前に謡えるようになるのが、先生の楽しみであったのであろう。

それから十七年、他の流派の人たちから、うらやましげられるほどよい先生に習い、今ではどうにか一人前に謡えるようになったと思っっている。うららかな日曜の朝など謡を謡っているのを隣家の人が聞かれ、謡はよいものですねといわれるようになった。老後の趣味として謡を習っていてよかったです、つくづく思っっている。

先生は、先生は、宮地さんは将来が楽しみである、私に謡をすすめた人に話されていたということを知ると、下手で望みがないかと思って止めるわけにいかなくなりました。これほど下手な弟子はおそらく初めてで、一人前に謡えるようになるのが、先生の楽しみであったのであろう。

それから十七年、他の流派の人たちから、うらやましげられるほどよい先生に習い、今ではどうにか一人前に謡えるようになったと思っっている。うららかな日曜の朝など謡を謡っているのを隣家の人が聞かれ、謡はよいものですねといわれるようになった。老後の趣味として謡を習っていてよかったです、つくづく思っっている。

先生は、先生は、宮地さんは将来が楽しみである、私に謡をすすめた人に話されていたということを知ると、下手で望みがないかと思って止めるわけにいかなくなりました。これほど下手な弟子はおそらく初めてで、一人前に謡えるようになるのが、先生の楽しみであったのであろう。

それから十七年、他の流派の人たちから、うらやましげられるほどよい先生に習い、今ではどうにか一人前に謡えるようになったと思っっている。うららかな日曜の朝など謡を謡っているのを隣家の人が聞かれ、謡はよいものですねといわれるようになった。老後の趣味として謡を習っていてよかったです、つくづく思っっている。

先生は、先生は、宮地さんは将来が楽しみである、私に謡をすすめた人に話されていたということを知ると、下手で望みがないかと思って止めるわけにいかなくなりました。これほど下手な弟子はおそらく初めてで、一人前に謡えるようになるのが、先生の楽しみであったのであろう。

それから十七年、他の流派の人たちから、うらやましげられるほどよい先生に習い、今ではどうにか一人前に謡えるようになったと思っっている。うららかな日曜の朝など謡を謡っているのを隣家の人が聞かれ、謡はよいものですねといわれるようになった。老後の趣味として謡を習っていてよかったです、つくづく思っっている。

小川雅雄氏お宅訪問

横浜能楽連盟常務理事
金春流 副島為安



小川邸にて(左より)副島、小川、半沢

第二回横浜能の番組に連絡先として、現会長のご尊父新堀源兵衛殿と並んで金春流小川雅雄氏の名前がのっています。氏は戦後初めて横浜に各流の家元級の能楽師を招いて、今日の横浜能の基礎を築かれた方々の一人で、氏と最も永くお付き合いをしている連盟個人会員の私と半沢久子さんの二人で新築祝いと卒寿の祝いを兼ねて幽玄第5号のために取材させていただきました。

氏は大磯の旧宅を一年がかりで純日本式の総檜造りに新築されたそうで、手水付きの庭を配した大変落ち着いたお宅でした。

現在は足が弱られて、歩行は支障がありませんが、立ち居は手助けが必要ですので、殆んど自宅に引き籠りがちとのことでした。3人で記念写真を撮らせていただきました。

氏の謡曲歴は古く、十九才(大正十年)の頃、川崎の叔母さんから観世流の手ほどきを受け、以来謡曲に興味をもたれ、富士見女学校や戸部洋裁学校で指導をしておられた金春流の本田秀男師に、その後市役所の綱島氏の紹介で高瀬寿美之師に師事されました。その後中村桃山能楽謡曲連盟会長を中心に東芝出身の塚原氏や市役所の小久保氏と共に、市電内にピラを張ったりして生徒を公募し、岩崎洋裁学校で謡曲の手ほどきが始められました。1年ほどで、当時の反町の市役所の成人学校に引き継がれました。

尚現在の守屋与四巳師が古河に入社されてからは、社内外の金春流の同好者も増えて全盛時代を迎え、小川邸での梅の会や目黒五百羅漢寺での例会等小川氏にお世話になった会合が思い出されます。老後は金春流能楽愛好者として、野村保氏に師事された時代もあり、写真は昭和四十八年濤々会舞台での小川氏の熊野の演能の一場面であります。

「横浜能の歴史」刊行される

一部七百円

第四十回横浜能を記念して、横浜能楽連盟は「横浜能の歴史」という小冊子を刊行した。

これは、新堀連盟会長執筆の横浜能楽界小史ともいえるべき、前文と、過去の演能の名場面の写真三十数枚を使つてのグラフィックな記録に、過去三十九回の番組の詳細が収録してある。まさに「横浜能」のすべてが一目瞭然とする、横浜の能楽愛好者にとって必読必見の記録集である。是非お買い求め賜り、座右の書として永久保存されることをお願いしたい。

これと、今回の四十回の番組とをセットで、定価七百円。御希望の方は、大洋印刷工業(株)田所氏へ御連絡下さい。TEL (〇四五) 六八一—四九一六

旧き佳き能舞台

金剛流 望月悦夫

様変わりしたが舞台は三十年前そのまま。蚊やりの煙香を傍らに畳の棧敷で能への思いを新たにした。ここは戦後の昭和二十四年に金剛流の東京での例会能が復活初演した舞台で、先代金剛巖宗家の「杜若」、現宗家の「殺生石」、奥野達也師の「景清」と演能記録がある。

その後例会能は染井の舞台に移り、この頃から私も能楽堂に足を運ぶようになった。下足を預け黒光りする廊下を踏んで棧敷に入ると観能の期待が高まるのを覚えた。現宗家のシテに若宗家永謙師の子方で「橋弁慶」であつたらうか。一世代前の力強い舞台の記憶がある。

金剛能楽堂も旧き佳き舞台で、京都は菊水鉦町の、町中とは思えない静かな場所にある。金剛巖師が京都新聞に連載した『初心不可忘』によれば、昔、茶人が住んでいた所で舞台の地裏に『菊水井戸』が今もあり昭和の初めまで良い水が出ていた。もとの舞台は江戸末期の蛤御門の変の兵火に焼け、石清水八幡の古い舞台を払い受けて建てたが先々代の茂山千作さんが踏み扱いて「それでこの舞台に建て直したんや」と御本人が皆に言っていたとのこと。この舞台は音響が良くて囃子方も「調子があえ」と償っていたそうである。

屋内で棧敷席のあるこの舞台では、毎年七月に虫干しを兼ねて装束や「雪の小面」を初め百三十面もある能面を展示し一般にも公開されている。

昨年機会を得て国立能楽堂の本舞台を踏ませて戴き、白木の立派な舞台に足もすくむ思いをしたが、舞姿が黒光りする床に写る旧い舞台は、見所を自ずと幽玄の世界に引入れてくれる。

横浜能楽連盟の諸先輩が十数年前に発起された能楽堂の楯音が間もなく聞かれ、新能楽堂に染井の舞台が復元されると聞いて、こけら落とし待望の念ひとしおである。

《編集後記》

第四十回横浜能の時発行する予定が「横浜能の歴史」の編集など、連盟の業務が思った以上ふくれあがり、ついに延期せざるを得なくなり、原稿をお寄せ頂いた方々には、大変申し訳ないことになりましたが、ここにようやく第五号を発行出来ました。お陰様で各流の御協力により、原稿の集りがよく、今号ものせきれなかつたぐらいです。感謝。

横浜能楽連盟連絡先

〒233 横浜市港南区丸山台二丁目
二九一七(新堀方)
☎〇四五(八四四)三三六